

# 中華人民共和国の鉱山を訪ねて

小 村 幸二郎  
Kōjirō KOMURA

## 朝の北京で

早朝の北京は小雨に光っていた。午前5時半 天安門前の広い通りには 無数の自転車が群をなして走っている。まだ眠りから覚めていないらしい宿舎を抜け出して 表通りへ出た。早朝の北京の素顔の一端をかいま見たい一心で その広い通りに沿う歩道を東へ向って歩きはじめた。傘はない。白と緑の美しい文化宮の前の広場では 老人達が 大極拳に余念がない。数10人づつの4グループが 同時に それぞれの指導者に習って身体を動かしているのだが 不思議なことに 足音も着衣のすれ合う音も全く聞こえない。ゆったりとした動き しなる老軀 全身の力を完全に抜いて没頭しないかぎり このような動きはできないだろう。大極拳が健康に良いと言われる理由は「無」の状態にある心と自然な動きにあるのかもしれない。一般に スポーツはスピードを要求し 一瞬の隙を許さないことからみれば 大極拳は異質と言えないこともない。

並木の葉蔭を歩いているうちに 信号が「赤」に変った。西瓜屋の挟い軒先に雨を避けて 信号が変るのを待った。交叉点の向い側に 真紅の地に白で「工業学大慶農業学大寨」と書かれた大きな看板が立っている。大慶油田の発見と開発は この国の鉱工業の前途に大きな希望を抱かせる快挙として 高く評価されている。また 言わば不毛の地であった大寨での農業開発は いわゆる現代化の中心とも言うべき農業開発の先駆的事業として 大慶油田の開発と並んで 賞讃された。この色鮮やかな看板は 優れた自力とそのたくましさを 極めて簡潔に しかも 適格に表現している。しかし「農業学大寨」というスローガンは 急速に消えつつあると聞く。その真の理由はよく分からないが 少なくとも 多くの人達が 日夜 額に汗して 荒れ果てた地を農地に改良した事実だけは永久に消え去ることはなからう。

この早朝の散歩の一つの目的地である西単に着いた。ここは「壁新聞」で有名な場所である。所々崩れ落ちた余り高くもない塀に 殆んど隙間なく 壁新聞が貼ってある。新聞とはいっても 印刷されたものではなく 墨字で書かれた言わばビラである。著しく簡略化され

た文字ではあるが 大よその意味は理解できる。自己の思いを切々と書き連ねたものもあれば 記録めいたものもある。そして 使用されている用紙の質も色も様様ではあるが すべてに共通していることは 文責者の姓名が明記してあることである。生々しく そして様様の話題を提供し 多くの人の心の糧になったものも少なくはなかったろうと思えるこの壁新聞も これから間もなく 姿を消したと伝えられている。一般庶民がそれぞれの主張と見解を これほど直接的に世人に訴えた場所は極めて少ないと思えるだけに 壁新聞が姿を消すことには一抹の淋しめいたものは感じられるが これも時の流れであろう。

しとしとと降っていた雨が 大粒になってきた。隙間なく続く壁新聞の端から端まで見て 宿舎へ帰ることにした。自転車の波は更に大きくなり 2台連結のバスも満員である。西瓜屋の店先には いつの間にか 西瓜の山ができていた。カメラを小脇に抱えて濡れている姿を見かねたのか やや小太りの西瓜屋の主人が店内で雨宿りするよう手招きしてくれたが 丁重にお辞儀をして宿舎への道を急いだ。食物を商うマイクロバスに多くの客が集っている。朝食抜きで家を出て来た人達かもしれない。大極拳に没頭していた人達の姿はない。今頃は 朝粥の膳を前にしているのであろう。時折走り抜けるトラックやバスの音以外には 物音らしいもの



写真1 天安門前へ通ずるメインストリート西長安街の朝の光景。  
バスと自転車はすべて通勤用であり乗用車はきわめて少ない

も聞こえてこない雨の早朝ではあるが 既に 人々は大きな流れをなして 活動をはじめている。 真黒のサイドカーが 軍服姿の2人に乗せて 東へ走り去った。 北京の一日のはじまりである。

人口700万人余といわれる北京がはじめて首都となったのは 今からおよそ3000年の昔 周の時代である。 当時 戦国時代にその名をとどめる燕は 現在の北京に薊城の名を付して都と定めたが それよりおよそ1000年前に 北京は幽州と呼ばれていたらしい。 燕が首都と定めて以来 北京は重要な地と見做されてはきたが 真に重要地となったのは 今からおよそ1000年前からである。 そして地名は 五代十国時代に遼の副都となって南京と呼ばれて後 燕京 中京 大都 北平と移り変り 明朝第3代の永楽帝が新宮殿を完成した記念の一つとして北京と改名して以来今日に至っているが 近世史の中で 真に首都となったのは 中華人民共和国の成立が宣言された1949年10月1日である。 新生中国に対する世界の目がより広くより深く注がれたことは周知のことであるが 多角的な判断の中には的を得ていなかったものも少なくなかったろう。 1947年の終り頃 情報収集と判断では名を知られている某国は 10年後の世界状況の分析の中で「……中国政府は内戦に悩まされながらも……」と予測したといわれているが 実際には この予測は外れた。 このことは 予測後2年足らずのうちに 中華人民共和国が成立し かつ 安定的な発展の道を迎えることを判断させるデータを 恐らく最高の頭脳を揃えていたであろうこの組織でさえ入手出来なかったことを示唆しているように思える。 広い国土におよそ9億5000万人の多様な民族が住むこの国については 現状を捉えることさえ容易ではないだけに その将来像を予知することは難かしいに違いない。 しかし 何故にこう

まで 予測が狂ったのだろうか。

日本に数々の文化をもたらした以前から この国は仏教の国としての歴史を辿ってきた。 仏教徒でない人からみれば 仏教ほど神秘的な宗教はないように思えるだろうし また それを信ずる人の内面を熟知することは困難であろう。 確かに 回(イスラーム)教徒の数は決して少なくはないが 途方もなく長い歴史と古い伝統に生きてきたこの国の底流には 仏の教えが息づいていたはずである。 このような唯心論的思想を基盤としてきた国が 何故 突如として 唯物論を前提とする社会主義の国に変貌したのだろうか。 新生中国の姿を理解し その将来像を予測する一つの鍵は この謎解きにあるように思える。 「万物流転」を 仏教の言葉では 「有為転変」といい 有為とは因縁によって生じた世の中の一切の現象を意味する。 かつて 戦乱の世に突如として興りそして 雅と消えた国は数知れない。 しかし この国ほど有為転変を経験した国は少ないのではなからうか。 例えば回数と呼ばれるイスラーム教を信仰する人がかなり多くいることは確かではあるが この国全体からみれば それはほんの一握りにすぎない。 そして 圧倒的多数は 唯物論を前提とする社会主義者であるとしても その心底に流れるものは仏教の道を完全に否定するものではなさそうである。 文化大革命からいわゆる4人組の時代 この国の人々の精神的支えとなっていたにちがいない仏教は 全く否定されたと云っても過言ではない。 しかし 最近 寺院を中心とする仏教活動が散見されるようになってきた。 このささやかな例からも 今も尚 この国に一つの信仰を求める何かがあることを窺うことができそうである。 こうした精神的な面は 一般に 長い歴史をもつ国に共通のことであり その内面を無視して物事を判断するのは良策ではない。

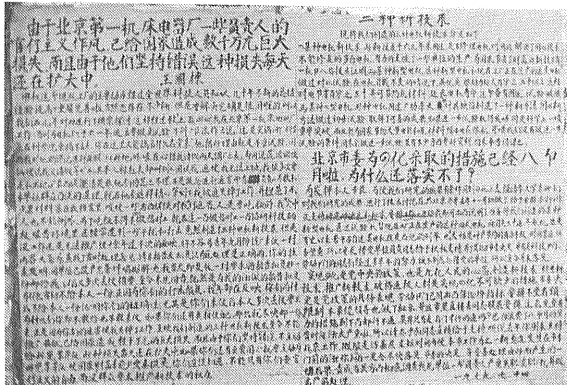
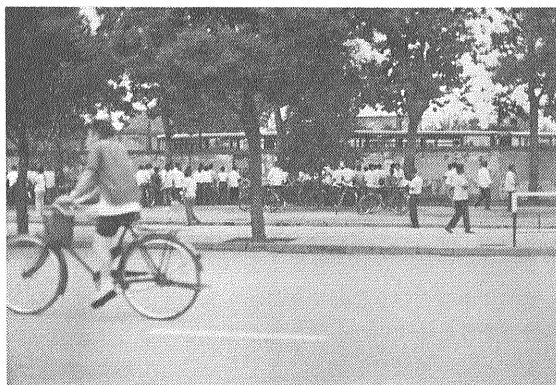


写真2 西単の「壁新聞」を見る人達(左)と新聞の一部(右) この「壁新聞」も今はないらしい。

ましてこの国は そうしたことの上に 長年にわたる苦渋の歴史に培かれた何かを秘めているに違いない。こうした諸々のことが生み出すに違いないものが何かを見極めることができなければ 眞の姿を把握するのは困難であろう。先に述べた将来予測が狂うことになった一つの理由は もしかすると この国が辿ってきた長い歴史の中での人々の生きざまとその生きる心との推察に何か欠けていたことかもしれない。骨器時代や石器時代を経験して 鉄器時代を迎え 更に 鋼を発見したことで人間の生活態様は大きく変貌した。素晴らしい鋼は切れ味の良い刃物を生む良材となり 貴重な存在となった。そして 鋼は鉄に勝るといふ見方が人々の心に宿った。しかし 自己中心の生き方は 仮りに実現したとしても 決して長続きするものではないし いかにも秀れた鋼があったとしても 鉄がなければ 名刀は作れない。素晴らしい鋼と一見弱々しくさえ見える鉄とを材料としない限り いかにも名工といえども その力量を発揮することはできないだろう。しかし 人の世では 鋼は有能 鉄は有能ではないと見做されることが少なくないようである。こうしたことは とかくありがちな 人間の弱さを如実に示す一つの典型的な例かもしれない。刃物に必要な鉄と鋼は 共に 同じような価値をもち 不可分の関係にある。そして それらが名刀として名を残すか鈍刀として果るかは お互の特質が理想的に組み合わせられるか否かで殆んど決まる。そして それを決定づけるのは 素材の特質を熟知してそれらを理想的に融合させ 長年にわたって蓄積された経験にもとづいて形造られる刀身の反りと焼を入れる水の温度 そして 焼を入れる直前の刀身の温度などである。鍛え上げた刀の価値は 焼を入れる一瞬の中に決まる。すべては 素材の選択から焼を入れるまでを手がける刀工の心と技術にかかっている。人間社会の態様にはこのような刀の例と似通ったことはないだろうか。世界人口のおよそ25パーセントを占めるこの巨大な国が 大方の想像を遙かに超えて 五星紅旗の下にいち早く結集した理由を模索してみると 鉄と鋼が それぞれの価値を認められ 名工の手によってうまく調和結合されたように思えてくる。もちろん その姿は 外国文化の導入等と関連して 少しずつは変わってゆくだろうが 少なくとも国が進むべき道の基盤が長い歴史の流れの中で培かれてきた何ものかを秘めていることだけは確かであろう。かつては国外の文化の発展に大きな役割を果たしたこの国が 今は 広く諸国に智識や技術を求めている。何故このように文化面で遅れが生じたのだろうか。確かに近世において この国が文化面で遅れをとらざるをえない外的要因があったことは否定できない

が 本質的には むしろ国内事情にあったように思える。紀元前550年に生れ 周時代の思想家として知られる孔子は 政治的・道徳的な人の道を説き教える指導者として今も広くその名を残している。その教えを儒教という。この教えに只管に忠実な学者や役人などは この教えを守るあまり 諸外国の文化の導入を拒みつづけた。一方 日本ではどうだったろうか。現代日本の夜明けが明治維新であったことは誰もが知っている。そしてその実現に奔走したのは貧困な武士とその子弟達であった。儒学を信奉する攘夷論者の激しい追求と迫害に耐えながら 彼らは 生きる希望と道を 外国の知識や技術の吸収消化に求めた。自己の求める道を切り開きつづける貧しい人達には 失うものはない。時には戦い時には逃避し 希望と絶望の激しい波の中に生きつづけたそうした人々の努力は やがて 「文明開花」と政治形態の改変として実り 新しい日本の誕生の礎となった。近世史にみられる日本と中国との文化発展度の差異について それぞれの歴史的底流に目を向けて見た場合 このように推察できるのではなからうか。いずれにしても 特権階級 言わば先に述べた鋼の一種が欲望のままに世の中に生き永らえることが所詮不可能なのは 人間社会の定理であり 名工は一人でなければならぬと決めてかかるのと無理が生ずるのも人間社会の特質の一つである。

1978年 「中華人民共和国は 労働者階級が指導し 労働同盟を基礎とする人民民主主義国家である」という憲法第一条は 「中華人民共和国は労働者階級の指導する労働同盟を基礎とするプロレタリア階級独裁の社会主義国家である」と 改められたということだが 何故このように改められたのだろうか。この短かい言葉の改変に 変転極まりなかった激動の歴史の流れに翻弄されながら生きてきた人々の充実した人生への飽くなき願望とその実現への自信が盛り込まれているように思える。

様々な想に耽りながら 天安門広場に独り佇んでいた。真紅のスカーフを首に巻いたあどけない子供達 緑色の制服姿の解放軍の若い兵士達 地方から見物に来たらしい人達 北京の一つの点で時を過していると 不思議に遠い歴史の流れよりは むしろ 近年の著しい変貌ぶりに目を奪われる。憲法第10条には 「国家は“働かざる者は食うべからず” “能力に応じて働き 労働に応じて分配する” という社会主義の原則を執行する」と述べてあるということである。能力や労働の程度の判断はそうたやすいことではなからうが ここに述べてあることは 誰にでも納得できそうなことである。しかし これを忠実に実行するためには 働く場の確保・提

供が前提となる。急速な達成を旨とする現代化の中で例えば生産活動におけるシステムや機器類の合理化が強くと求められるとすればこれに係わる余剰人員と働く場との関係はどのようになってゆくのだろうか。広大な国土は働く人々を限りなく受け容れる何かを秘めてはいるだろうが現代化という言葉に関連してふとこのようなことを脳裏に浮べた。

人の絶えない天安門広場での一時である。

### 頤和園

「ニーツアオア・チンチャオ・イ・リヤンチュ・ツ・チーチオ（お早う タクシーを1台呼んで下さい）」

全く片言の中国語が タクシー申し込み場の係員に一度で通じた。2時間ばかりの自由時間を利用して北京の郊外にある頤和園へ行こうというわけである。少々不安ではあるがカメラとメモ帳だけを手にした1人での見学である。中型のタクシーが来た。細面の若い運転手はおとなしそうである。

「チンタオ・イエ・ユアン・チュイ（頤和園へ行って下さい）」

「シ（はい）」

車は民族飯店の西に建つ復興門を右折して護城河に沿う道を北へ向った。河畔に立並ぶ柳の枝はそよ風になぶられてしなやかに舞っている。岸辺では麦藁帽子の親子が寄り添って釣糸を垂れている。西直門を左へ曲ると動物園 体育館 紫竹院公園が続きやがて広々とした田園風景に変わった。民族飯店からおよそ15キロメートル 20分後に頤和園に到着した。

「チン・ツアイチオ・ル・トン・イ・ホエ・ル（ここで少し待って下さい）」と運転手に告げて降りた。運転

手は車の色とナンバーをメモして渡してくれた。とても親切な若者である。

頤和園の50余の建物は人工湖であるおよそ42ヘクタールの昆明湖を控え小高い万寿山の山腹の深い緑の中に見事に配置されている。市民の憩いの場である北京最大のこの公園を訪ずれる人は後を絶たない。自然美と人工美とをうまく調和させたものは数多くみられるがこの頤和園はその傑作の一つであろう。短かい時間を活用してここを訪ずれようとするに当ってはその美しさを見たいということの他に悪名高い西太后にまつわる建物や調度品を見ることが何かを見つめ或いは思う糧の一つになるという目的意識があった。

頤和園の入口に当る東宮門には光緒帝の直筆と言われている「頤和園」の大きな額が掲げられている。西太后が政務を司どった仁寿殿は東宮門に入って間近の所に建っている。特に目を見張らせるほど大規模でもなければ他の建物より豪華でもなく40年に亘って悪政が決断された建物にしては陰湿でもない。西太后の寝所であった楽寿堂は住時の面影をそのまま残している。隣接する徳和園の豪壮大な舞台ではどのようなものが演じられたのだろうか。楽寿堂の門前にある船着場付近から湖岸に沿って極彩色の花鳥山水画で飾られた廻廊がおおよそ700メートルも続いている。光を通さぬほどに茂る古い巨木の深い緑の中に紅柄色と黄瑠璃色を基調とする優美な建物 昆明湖の水面に落ちるその影 吹抜けのこの廻廊からの眺望は格別である。一度の食事に農民5000人の一日分の食費に相当する費用をかけ金の器に盛られた128種類もの料理を賞味したといわれる西太后とその主な側近達は恐らく美食に舌鼓をうち妙なる楽の音に舞う名優たちの演技に時のたつのを忘れ

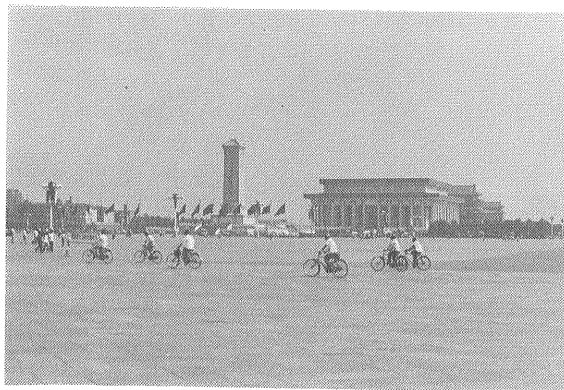


写真3 天安門広場

中央の塔は「人民英雄記念碑」その右側は「毛主席記念堂」。花崗岩を敷きつめたこの広場の面積はおおよそ40ヘクタールもあり40万人の集会が可能である。東長安街と西長安街を加えると100万人の集会ができる。



写真3' 北京最高のホテル「北京飯店」の新館（右）と旧館（左）  
豪華な街燈はソ連との密月時代に建造されたものである。

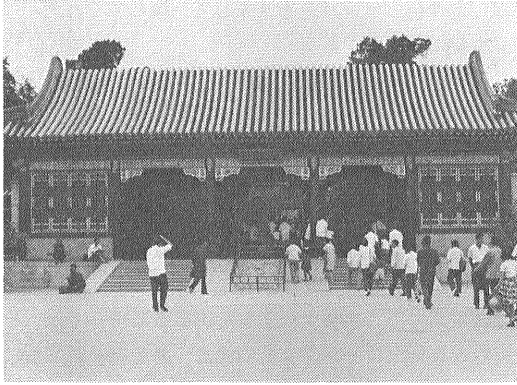


写真4 頤和園の正門になっている「東宮門」  
上方の額の文字は光緒帝の自筆である。

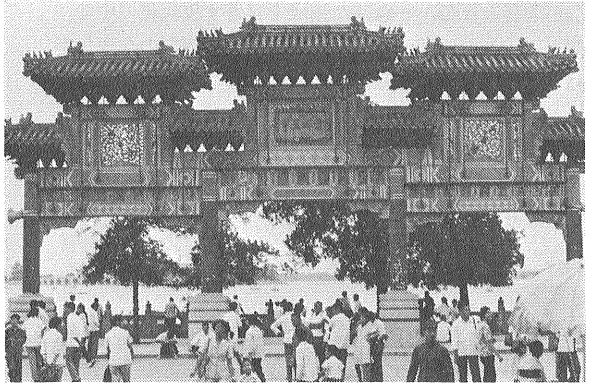


写真5 昆明湖畔に建つ華麗な門「雲輝玉宇」  
沖縄の「守礼の門」によく似ていて興味深く  
屋根瓦の黄瑠璃色が高貴さをもたせるポイント  
になっている。

この美しい廻廊や岸辺で そよ風にたわむれたことだろう。

湖畔に建つ「雲輝玉宇」の門から万寿山の頂上に建つ4層8角の仏香閣に至る立体的景観は見事である。この門に入っているうちに 不図 沖縄の「守礼の門」を思い浮べた。廻廊が尽きた所は 後湖への入口である。そこには 西太后ご自慢の石船が舫っている。割合に単調な彫刻を施したこの石船は 恐らく観光船として建造されたものだろうが 実際に水面を走り回ったのだろうか。この船を見て 帰路に着いた。

北京の水源地として 又 交通路の一つとして利用さ

れる一方 風景美の創造と人の心の安らぎに大きな役割を果たしている昆明湖は 雲南省の省都昆明近郊の湖を模した人造湖である。そして この湖を含む一帯は 清朝の雍正帝の治世に夏の離宮となり 次の乾隆帝が統治したおよそ60年間は 一日も休まず建築が行なわれたと伝えられている。自然美の中に雄大な湖と壮大かつ秀麗な多くの建造物が織りなすこの景勝の園は 以来 一般民衆と共に生きつづけてはきたが しかし 清朝末期の西太后の治世を迎えて 次第に 特権階級の専有物となって民衆から遠ざかっていった。そして 時の過ぎゆくまに 清朝は没落への道を迎えることになる。

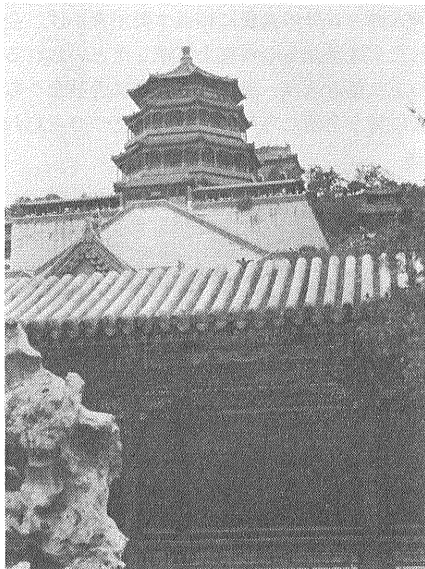


写真6 万寿山の頂上に建つ4層8角の仏香閣  
高さ60mの大理石の壇の上に建っており  
高さは38メートルである。

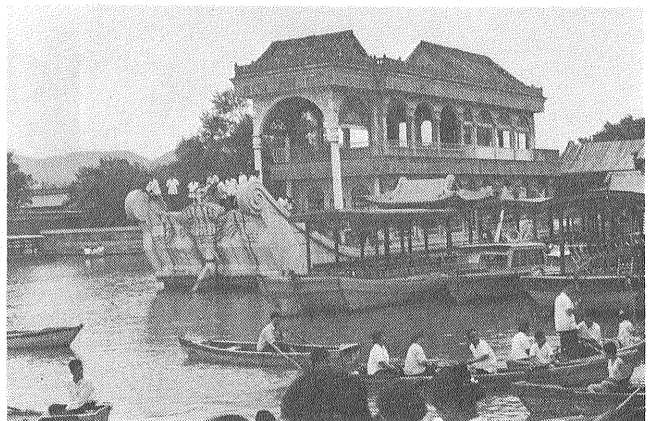


写真7 昆明湖に舫う西太后ご自慢の石船  
本体と1階は大理石 2階は木造である。

西太后の正しい名は慈禧皇后である。北部の貧乏貴族の子として生れた西太后は 17才で後宮に入り 咸豊帝との間にもうけた子供が6才で同治皇帝となったのを契機として 権力を手中にした。贅沢三昧の日々を送りながら1908年に74才で逝去するまで 権力の座につい



ていた西太后は 一体 どのような国益を生み そして残したのだろうか。 一般に伝えられていることが事実だとすれば この権力者が母国にもたらしたものは 民衆に犠牲を強い屈辱の歴史以外の何ものでもなかったということになる。 貧乏貴族の娘が 皇帝の子を生むという一つの偶然の出来事を契機として 40年にわたって権力の座を保持し 悪業を続けたということになるが 果して この女性だけが汚名をきせられるべきものだろうか。 真の友情に甘言は必要でなく 厳しい声に憎悪の感情を覚える者は真の指導者たりえない。 美しい園を足早に歩きながら 何故この美しさの中で嫌悪すべき政事がなされなければならなかったのかと つくづく思った。 余り美しいがために 或いは そのような政事が行われるようになったのだろうか。 少なくとも 贅沢三昧の生活を維持するために費消された国費が 当時の国家維持に悪影響を与えたことだけは確かであろう。 人心と世情に精通することは指導者たる者に欠くことの出来ない基本的条件である。 誰の目にも悪の権化とさえ映ったであろうこの女性に 真の国情と民衆の心とを説き 或いは 毅然として 厳しく戒めた勇者が居たか否か 或いは そのような人達は相次いで粛清されたのか よく分らない。 恐らく 嫌悪すべき女性の1人として 西太后の名は未来永劫消え去ることはなからう。 しかし 事の善悪を踏えてみても 40年もの長い間にわたって権力の座に君臨した当時のこの女性の姿に想を馳せる時 何故か この貧乏貴族出の女性が哀れにさえ思えてくる。

足早に東宮門を出た。 運転手はすぐ気が付いたら

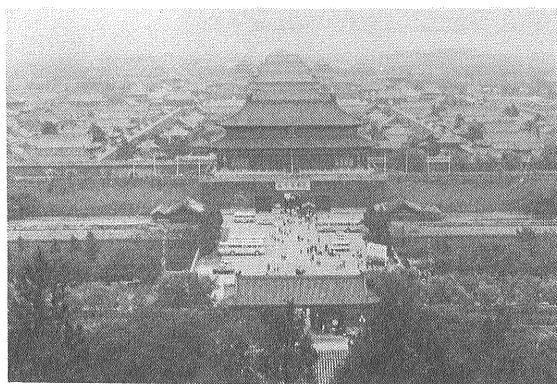


写真8 景山からの故宮の展望

「故宮博物館」の額が掲げているのは神武門最後方の門は天安門 その右手の大きな建物は人民大会堂。 人民大会堂の手前の植生の部分は辛亥革命の指導者である孫文の号「中山」をとって名付けられた中山公園

い。 「チンタオ・ジンシヤン・チュイ（景山まで行って下さい）。 笑顔でうなずいた運転手は 「ジンシヤン」の発音を繰り返し教えながら 煙草をすすめてくれた。 護城河の岸辺では 元の位置で 親子が釣糸を垂れている。 車は 西直前内大街から西四北大街を通り 北海公園を左手に見て 景山公園前で停った。 ここから頂上までは かなり急な石段である。 運転手は 道を隔てた故宮（紫金城）広場で待ってくれるらしい。

景山は高さ92メートルの人工の山である。 眼下の故宮や北海公園をはじめ北京市街を一眺できるこの山の頂上からの眺めは素晴らしい。 息を切らしながら登りつめた頂上には 小じんまりとした独特の東家が建ち 多勢の人が憩っていた。 一説によれば 紫金城を取囲む堀を造った時に掘出された土を盛り上げたものと言われ 又 籠城に備えて 元のクビライが石炭の山を造った上に植樹したとも言われているが この小さな山が 何時どのようにして 何の為に造られたのか判然としなはい。

筒子河と名付けられた水濠に囲まれた故宮は 東西750メートル 南北960メートルの広大な面積を占め 明朝以後およそ500年の重厚かつ壮麗な姿を見せている。 景山からの光景を賞で 歴史の流れをまざまざと見せる故宮とその膨大な所蔵物に目を見瞠る人は多い。 しかし これらの人達の中に 明朝最後の恩宗皇帝が 季自戒の攻撃を前に服心の部下に裏切られ 最愛の皇妃と皇女を自らの手で斬殺した上で 景山の麓で首吊り自殺をして果てたという憐れな出来事を知っている人がどれほど居るだろうか。 栄耀豪華を恣にした者の末路は いつの世も 哀れである。



写真9 明朝と清朝の皇城であった故宮（紫禁城）の正門となっている天安門

メーデーなどの折 正面の白い手摺りのある部分に指導者が並ぶ。 その席順はこの国の政治・経済の指向性を推察する一つの目安になる。

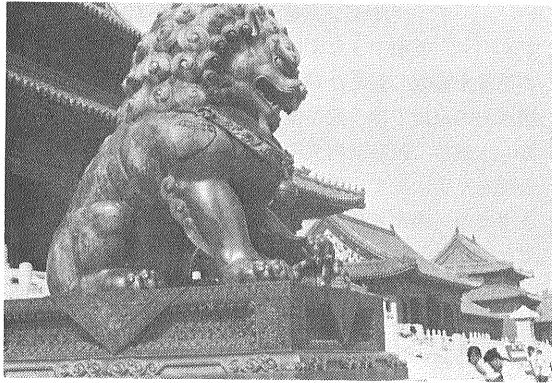


写真10 太和殿の樓門になっている「太和門」（左側の建物）の前にある一対の青銅の唐獅子  
この唐獅子は青銅製では中国最大で 鋳物としては世界的な傑作の一つとされている



写真11 故宮最大の建物である「太和殿」  
間口66メートル 奥行33メートルのこの建物の内部の造作や調度品は豪華の一語に尽きる

急な石段を馳け下りた。運転手は頃合を見計っていたのか 石段を下りきった所で待っていた。出発してから宿舎へ戻るまで丁度2時間 タクシー料金は22元であった。

### 万里長城と定陵

午前8時過ぎ 北京から張家口へ向う並木道は 意外に静かであった。段ボールを積んだ小型トラックは何処へ行くのだろう。余程朝早くから仕事をしていらしく 上乗りの夫婦らしい2人は 程良く並べたダンボールの上で ぐったりと寝込んでいる。広々とした農園には 人影は少ない。北京市内に較べて自転車が極端に少なく トラック類が多いのは 北京への農業生産物の供給地帯だからだろう。やがて 道はゆるやかな上りになった。そして 右手に 広くそして深い谷が見えてきた。山麓を客車の長い列を曳いて 蒸気機関車が行く。排煙が棚引かないことから察すると 線路の勾配はかなり急なのだろう。ゆるやかなカーブを廻った所に踏切りがあり 既に 赤ランプが点滅していた。踏切りに 小さな黄色の立札が立っている。日本では「踏切注意」とでも書かれているのだろうが この立札には 上段に「小心火車（汽車に注意）」 下段には「一慢二看三通過（ゆっくり よく見て 通りなさい）」と書いてある。山麓を走っていた列車がゆっくりと通り過ぎて行った。坂道は続き 道の両側の山並は 次第に 峻しく変貌し やがて 前方の山頂に 白く帯状の物が見えてきた。「月から見える世界最大の建造物」と言われる万里長城である。北京からおよそ2時間 北西へ80キロメートルの八達嶺には 既に 多くの遊客が居た。



写真12 太和殿の皇帝専用の通路  
現在は立入り禁止である。大理石の一枚板の彫刻は見事で 殆んどいたんでいない。

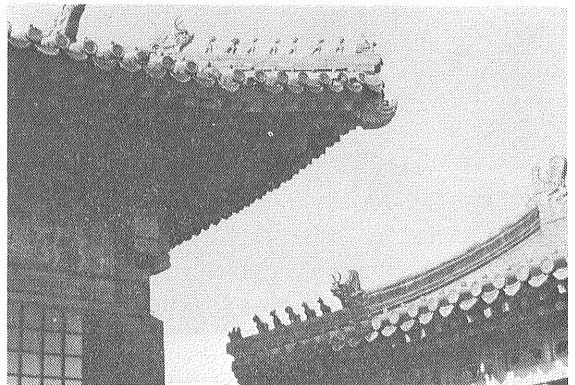


写真13 故宮の建物の屋根  
黄瑠璃色の美しい屋根の先端には先頭の人と後に続く動物を模した飾りがある。例外なく 奇数なのは 吉兆・福に係わる縁起を示すものだろう。

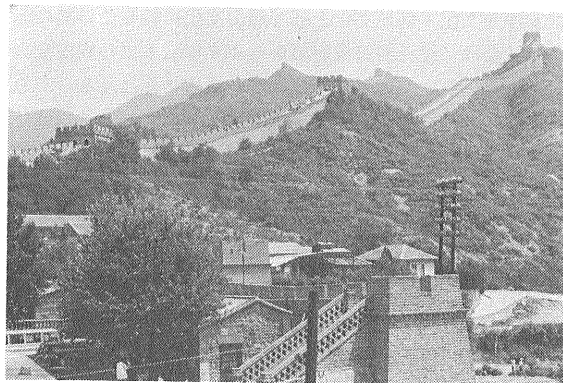


写真14 八達嶺付近の「万里長城」

写真の長城は傾斜がゆるやかで女性やお年寄向の見学コース。山の頂上に建っているのは望樓で敵を発見した時に狼火を上げたといわれている。

渤海に面する山海関から甘粛省の嘉峪関まで 支城を合せておよそ6000キロメートルに及ぶと言われる万里長城の壮大さには 將に 息をのむ思いである。基底の巾6.5メートル 上面の巾5.5メートル 高さ5.5メートルの片側には 外敵に向って 更に 高さ1メートルの防壁があり 山の頂上部には立派な望樓が建っている。連なる山の尾根に沿うこの建造物の上面の起伏は激しく時には傾斜40度前後の急階段さえある。敵影を見た番兵はこの望樓で狼火を打上げ 兵隊は この起伏に富む上面を走り 防壁の隙間から矢を射かけたのであろう。万里長城は およそ2500年前の周時代に着工され 以来各王朝による増築・強化を経て 明時代(1368~1644)に完成したと言われている。かつては黄土を盛り上げたにすぎなかった長城は 気が遠くなるような年月を経て次第に堅固な建造物に姿を変えたわけであるが 着工してから完成するまでには 一体 どれ程の費用と労働者と材料が使われたのだろうか。秦の始皇帝の治世でさえ およそ30万人の兵士と強制的に徴用された数100万人の農民がその建造に従事したということである。古い時代の巨大な建造物は世の中に多い。万里長城やエジプトのピラミッドなどはその代表的なものであろう。共に文明の発祥の地として知られ 巨大な建造物もっている点で共通しているが その裏面に 絶対的権力を持っていた封建的君主の存在という共通性がみられることを忘れることはできない。唯 万里長城の一つの救いは エジプトのピラミッドやスフィンクスやルクソールの建造物などが王家の為に造られたのとは異って 国土防衛の為に建造されたということである。

過去の遺物は 将来に生きる私達にとって 真に生きる術を教える貴重な道標の一つである。 「月から見え

る建造物」とさえ言われるこの巨大な万里長城をはるばると訪ずれた人達の中に その建造に使役された人々の辛苦に想を馳せ 当時の世相を回顧する人がどれほど居るだろうか。 延々と続くその巨大な姿に驚嘆し 四季折々の美しさを愛でるだけではなく その問いかけに答えることも無駄ではなからう。 現存する古代の巨大な建造物の殆んどが一般大衆の自由発想と努力とで造られたものでないことを思うだけでも 一つの教訓として受け止めてよい何かがある。 「天高雲淡(天高く雲淡し)」という句で始まる故毛沢東作の「六盤山」という詩の中に「不到長城非好漢(長城に到らざればオトコにあらず)」という一節があるが この短かな一節の中には 遠い歴史の流れを想い 現在を見つめ そして未来へ続く道を求めて雄々しく生きることを望む思いがこめられているような気がする。

簡単な昼食を終えて 八達嶺を後にした。北京への道を途中から北へ折れてから50分ばかり走って 「明の13陵」に到着した。 およそ7キロメートルに及ぶ参道の大宮門を通り抜けると 馬・キリン・象・ラクダや想像の動物など それぞれ4頭づつの大きな石像が並んでいる 13陵は 一直線に走る参道がとぎれた所からゆるやかにうねる天寿山にあった。

明朝第3代の皇帝として有名な永楽帝をはじめ 13人の皇帝の墓所が点在する天寿山は きわめておだやかな姿態を見せている。 1957年に発掘された第14代の神宗の墓所「定陵」に入ってみた。 冷んやりとした地下室は巨大な石を積重ねて造られ 1本の柱も見当たらない。一番奥まった部屋に 木棺が並んでいる。中央の木棺には神宗の遺体が 両側の木棺には2人の皇后の遺体がそれぞれ納められていたということである。 墓所のす

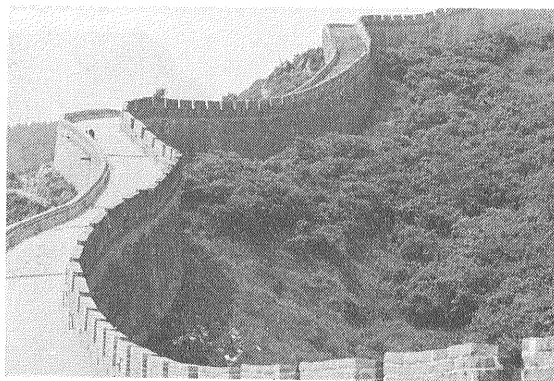


写真15 男性向の見学コースの一部

傾斜の急な所は40度以上もある。あくまでも尾根伝いに造られており谷を通る部分は見当たらない。敵側(右)にだけ防御壁が造られている。



ぐ近くにある定陵博物館には 発掘された副葬品の数々が展示されている。 宝石をちりばめた王冠や帯 黄金製の洗面器や食器など 神宗の権威の象徴ともいえるこれらの展示室の壁面には 農民虐待の有様を示す絵画が掛っている。 1573年からおよそ48年間 権力の座にあった神宗の嗜虐的性状を物語るこれらの絵を見ていると 憤りを覚えずにはいられない。 しかし 神宗の成長過程の環境に目を向けてみると いかにも権力の座についていたとはいえ 一方的に憎みそして批判する気にはなれない。 歴史上悪名高い皇帝とはいえ 人間らしく生きようとする心がなかったわけではあるまい。 しかし 人々の目は いつの世も その心に向けられるよりもむしろ 表面に現われる行動や結果に向けられがちである。 好むと好まざるとに係わらず そうしなければならぬ立場におかれる者は孤独に耐えねばならない。

皇帝の座について12年後 神宗はまだ22才であった。そしてこの時 この定陵の建造に着工したと伝えられている。 生前に自分の墓を造る人は今でも居る。 しかし わずか22才で自分の墓を造る人は稀である。 「好みの問題」と言ってしまうえばそれまでだが 当時のこの国の2年分の予算に相当する経費を投入してまで この若さで墓を造ることを決断するには 何か余程の客観的理由があったのではなからうか。 仮りにこの若さで墓を造るにせよ 長い年月をかけてじっくりと工事を進めていけば 農民を虐待・搾取することもなかったろうし 展示室の絵画もかなり異っていただろう。 因みに 神宗の治世の年号は「万曆」であり この万曆帝の所業は現代中国の精神から見れば 西太后と並んで 封建政治の悪の象徴とも言えよう。

およそ170万年前と推察される元謀人(猿人)にはじま



写真16 「明の13陵」の参道に並ぶ動物の石像  
この中に「カイチ」という想像上の神獣の石像があるが現地の人殆んど知らなかった。

り沙苑文化・仰韶文化を経て龍山文化に終るこの国の原始社会は 紀元前21世紀頃から 476年頃までの奴隷社会を迎え一般民衆の受難の歴史が始まることになる。 そして 戦国時代に入って以来 2400年余にわたる封建社会に入ったわけであるが 戦国時代に次ぐ秦時代の末期に当る紀元前 209年には 陳勝・呉広の農民戦争が起っている。 史上有名な始皇帝の時代のこの出来事は この国の人々の忍耐力とたくましさを知る上でも無視出来ないものである。 福島県の一部に 秦という姓があるが この人達と始皇帝又は秦時代とは関係ないのだろうか。 東(後)漢時代に入り 紀元57年には 日本から洛陽に遣使が訪ずれている。 この時代の末期になると 朝廷は農民蜂起の抑圧に力を削がれて急速に衰え 豪族達は その勢力拡張のために 至る所で抗争と併合を繰返し 一般大衆の苦しみは想像を絶した。 その典型的な例が 甘肅省に生れ 靈帝の逝去を契機として起った朝廷内の権力争いに乗じて この時代最後の皇帝となったわずか9才の献帝を擁立した董卓である。 董卓は 自己の欲望と保身のために 城を築き 財宝・食糧の蓄えに奔走し そのためには殺戮・強奪を当然のこととして繰返した。 そして 銅錢1枚で1キログラム買えた粟の値段は 2万倍にも3万倍にも高騰し 庶民は苦しみの余り絶望感に陥った。 当時 長安の都では 「董卓よ 何故お前はまだ生きているのか お前は死んだ方がましだ」という意味の 「千里の草はなぜ青い 十日にト<sup>ト</sup>えば生きぬがごとし」という唄がはやったということであるが 「唄は世につれ 世は唄につれ」という言葉を裏付けるものとしても興味深い。 尚 この唄の中の「千里の草」は「董」を 「十日にト」は「卓」を巧

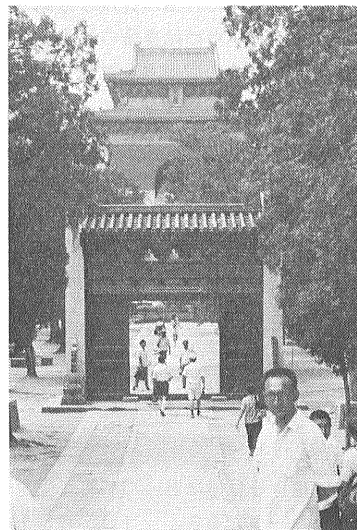


写真17  
天寿山の山麓にある「明の13陵」の一つ「定陵」  
明の第14代皇帝である万曆帝として知られる神宗の陵である。

みにすりかえたものである。

明朝末期の権力者の横暴と悪政は 少なくとも独立国家としての体面を保っていたこの国の封建社会の崩壊の要因となり 清時代に入り 西太后の治世になって 半封建社会 そして 半植民地となり 長い歴史を辿ってきたこの国の容貌は著しく変ることになる。悪名高い西太后と神宗に係わる遺物を目の当りにして 考えさせられることの多かった短い北京近郊の見学であった。一日の仕事から解放された人の波が ゆったりと動いている夕刻である。北京の中心とも言うべき王府井（ワンフーチン いわゆる北京の銀座街）は 凄人混みである。新華書店のすぐ近くにある本屋に入ってみた。この店は外国語図書専門の店である。機械・電気・農業等に関する書籍はざらりと並んでいるが 地球科学に関する書籍を見付け出すことはできなかった。上海・南京など 長江沿いの都会や自然美のカラー写真を中心にまとめた立派な本には 日本語の解説がある。店内を一通り見て 「人民日報」本社入口に張り出されている真新しい新聞を見た。漢字ばかりの しかも 簡略化された文字の多い印刷物だけに こまかなことは分らないが 大よそのことは見計がつく。人の波に押されるようにして 北へ向った。世界的に有名な交響曲「黄河」のレコードを買い求めたくて訪ずれてはみたものの 目的の店の大きな扉は 固く閉ざされていた。溢れるばかりの人で賑わう王府井とは全く異って 天安門広場の少し南にある瑠璃廠（ルリチャン）は 予想外に静かであった。挟い道路の両側に並ぶ古びた家並には 郷愁めいたものが感じられる。ここは 古くから知られている 商店街の一つである。骨董屋・印鑑屋・掛軸屋そ

して書道関係の物を商う店が並んでおり 客の多くは外国人である。路面の荒れたアスファルトの道を ささやかに荷を積んだりヤカーが 遠慮深げに通り返り通った。所々に光る水溜りは 朝降った雨の名残りであろう。背広姿の男も歩けばランニングシャツの若者も通る。人を見てそれに追従しないのは人間本来の姿なのだろうが 自分が住む環境の故か こうした光景を見ると 異質の何かを見るような感じさえする。古びた店に入ってみた。店内には 古い焼物がぎっしりと並んでいる。いかに年輪を重ねたような落ち着いた形と色の手頃な壺を見つけたが 手を出せる値段ではなかった。一般に物価の安い国とはいえ やはり 良い物にはそれなりの値がついている。

中国滞在最後の夜 西単から少し北へ入った地址西四南大街にある同和居飯庄で夕食をとった。中程度のごく普通の食堂の奥にある別室は 小じんまりとしている。外観は大したことはないが 実は この店には 他の店にはない珍品がある。いわゆる広東料理の店だが その料理の一つ「三不粘」がそれである。ほんのりと甘く かなり粘り気のある黄色の「三不粘」は どちらかと言えば 菓子類である。大きな器一杯に入った「三不粘」を 可愛い娘さんが 実に器用に スプーンで各人の皿に入れてゆく。その手際の良さに見入っているうちに 「三不粘」が スプーンに全くくっつかないことに気がついた。「三不粘」という名は スプーンにも皿にも歯にもくっつかないことから付けられたということだが 将にその通りで 実に不思議な食物である。主な材料は緑豆と砂糖ということだが その製法

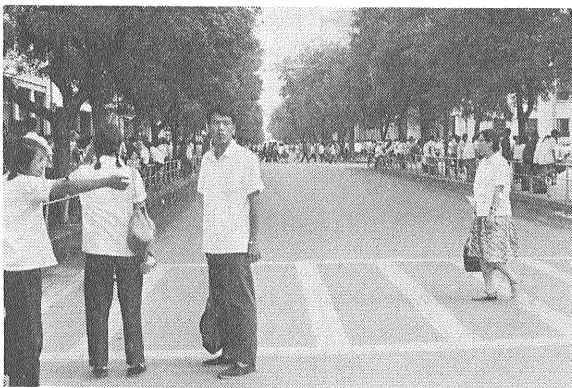


写真18 北京の銀座通りともいうべき「王府井（ワンフーチン）」  
この通りの左側に「人民日報」や「北京市百貨大樓（デパート）」などがある。中国で最も有名なシンフォニー「黄河」のレコードを買いに行ったが 既にレコード店は開いていた。



写真19  
天安門広場の少し南にある古い商店街「瑠璃廠（ルリチャン）」  
この通りの両側には骨董屋や印鑑・硯や墨などを商う店が多い。

は いわゆる企業秘密らしく 遂に教えてもらえなかった。

相変らず暗い北京の夜。 螢灯のように小さな光を揺らしながらゆく自転車も少ない。 およそ1カ月にわたる中華人民共和国の旅も終りである。 様々のことを想い出しているうちに 再び訪ずりたい気持ちに馳られた。 広大な国土を構成する地質と大規模の構造 そして 多種多様の鉱床 未知の部分が余りにも多いだけに じっくりと山を歩いてみたい欲望にかられるのは 一般に平均的な記載の多い書物では学ぶことの出来ないことが多い故かもしれない。 北京を出発して最初に訪ずれた武漢で見た屈原の像を想い浮べては 洞庭湖畔の汨羅の渚に身を投じた政治家であり詩人でもある屈原の無念を思い 遠く雲南の地で 夫婦愛の結晶と言われる「クオチャオミエン」という麵料理を賞味する機会がなかったことや 東川鉱床群に係わる課題 そして 技術協力に関する諸々の問題など 夜の更けるにつれて 目はさめる一方であった。 もう香り高い茉莉花茶(ジャスミン・ティー)を賞味することはない。

### おわりに

世界第3位の面積をもつ国土に世界人口のおよそ4分の1に相当する9億5000余万人が住むこの国は 各種資源の開発等に関連して 世界の耳目を集めている。 国際的に 発展途上国と見做されているこの国は 今後一層 いわゆる先進諸国との交流を深めながら 発展への道を辿ることだろう。 技術の向上も学問の進歩も お互に胸襟を開いて情報・資料・意見等を交換しながら目的に向う意欲をもたない限り 遅々として進まないだろう。 これは 技術や智識を投入して何かを達成しようとする場合でも例外ではない。 私達が一般に入手できる鉱物資源関係の論文には 以前は鉱床(山)名やその位置などを伏せてあるものが多かったが 最近ではこれらを明記したものが少しづつ増えている。 その主因は判らないが もしかすると この分野での自信がかなり急速に高まっていることを暗示しているのかもしれない。 将来を見つめる目が 過去の経験の一つの糧として肥えることは当然であるが それをどのように咀嚼して吸収するかによって かなり変るのが通例であり 一つの論法に必要以上に拘泥するのは決して好ましいことではない。 文化大革命がこの国に残した傷の大きさは計り知れない。 それだけに 多くの技術と智識の吸収には並々ならぬ努力が必要なわけであるが それには先ず 十分に熟慮された上で得られた不変の指向性を明確にし それに係わ

る既存データを組上に乗せることも欠かせない。 十分に調査・検討してそれなりのデータを作成することが出来る場合は問題はないが 既存データを一覽するだけでは いかに秀れた技術者や学者であっても 正しく判断し将来性を見透すことは困難である。

諸外国との友好の輪を広げながら学びかつ協力を得ようとするこの国は 鉱物資源の探査・開発について 一体 どのようなデッサンを描き どのようにそれを仕上げようとしているのか それぞれの分野での判断を誤ってはならない。 広大な国土の地理的・気候的差異と変転極まりない長い歴史の激しい流れの中で この国の人々のたくましさや忍耐力は育まれてきた。 そして今は そうしたものが先進国への道の建設基盤となっている。 しかし あらゆる分野で世界の耳目を集めているこの国では 新しい技術や智識を納得した上で画かれたデッサンの仕上げの段階で そのたくましさや 仕上りの変更やデッサンの書き直しという形で表われることもある。 まだ完全には門戸が開かれていないこの国は 広大な国土と風俗・習慣そして言語さえ異なる多くの民族を擁して どのように大同団結してゆくのだろうか。 その将来像を思い その移り変りを凝視しながら 共に歩ける道を探し求め そして建設することが肝要であることはいうまでもないが それは 決して た易いことではない。 近年 鉱山開発に係わる公害規制が制定され 従来 余り懸念されなかった公害処理設備が必要になったと聞く。 「四つの現代化」の中心とも見做される「農業の現代化」とその開発という面からみれば 鉱山によっては農業関係との調整に長時間を要することもあろうし 又 現代化と労働力の兼合いの問題その他 新規プロジェクトの達成には 解決されなければならない問題が多々あるように思える。 諸外国に学び或いは諸外国の協力を期待するというを逆にみれば 諸外国で一般化していることであっても この国では それからかなりかけ離れたものがあるということになるのではなかろうか。

「中華人民共和国の鉱山を訪ねて」も 今回で稿を閉じることになった。 本来ならば 標題通り 訪ずれた鉱山の地質鉱床や現況等を中心に記載すべきだが 標題とは全くかけ離れた しかも 内容の乏しい拙文を綴ることになった。 各鉱山の記載を殆んど割愛したことについては 「おわりに」の中葉の記述から想像して載れば有難い。